宮城県文化財調査報告書第 143 集

上 野 館 跡（Ⅱ）

－ 平成2年度発掘調査報告－

平 成 3 年 3 月

宮 城 県 教 育 委 員 会

序　文

宮城県松山高等学校は、近世仙台藩で一族の家格を持つ上級武士茂庭氏の居館であった上野館の地に建っております。校舎は昭和26年に松山中学校として建てられたもので、40年ほど経て著しく老朽化したため、このたび鉄筋コンクリートの校舎に新築することにいたしました。

建設地については、この地が上野館の跡であることを考慮して種々検討いたしましたが、他に適地が選定できなかったことや、昭和26年の松山中学校建築の際の大規模な造成工事により遺構が壊滅していることが予想されたことなどから、現在の敷地内に求めることになりました。

昭和63年度に遺構の遺存状況を確認する調査を実施したところ、掘立柱建物跡などの遺構が場所によっては良好に残っていることが明らかになり、校舎は遺構の密度が希薄な地域を選定して建設することになりました。

また、平成元年度には校舎建設に係る部分の調査を行い、文献等の記録では知り得ない館の変遷が明らかになっております。

今年度は校舎周辺の設備関係施設に係る調査を行い、これまでに類例の少ない肥前産の陶器や焼き塩を作る際に使用された素焼きの壺など、上級武士の生活の一端を示す貴重な遺物が出土しております。

本報告書が社会教育の資料として広く活用されることを願うとともに、調査に協力をいただいた松山町教育委員会並びに炎天下で直接発掘作業にあたられた方々に対して厚く感謝の意を表するものであります。

平成3年3月

宮城県教育委員会 教育長　**大立目　謙直**

目　　次

序　　文

1．はじめに…… 1

2．調査の方法と経過…… 2

3．発見された遺構と遺物…… 3

D－1区…… 3

D－2区…… 12

D－3区…… 27

D－4区…… 29

D－5区…… 37

D－6区…… 38

4．考　　察…… 39

（1）　記録に見られる上野館跡…… 39

（2）　発見された遺構について…… 39

（3）　出土遺物について…… 43

引用参考文献

例　　言

1．本書は宮城県教育庁が計画した宮城県松山高等学校校舎新築に伴う、上野（うわの）館跡の第4次発掘調査報告書である。
2．調査は宮城県教育委員会が主体となり、文化財保護課が担当した。
3．発掘調査および整理・報告書作成にあたっては、次の方々から多くの指導・助言を賜った(敬称略)。
入間田宣夫（東北大学教授）岡村道雄（文化庁記念物課調査官）
4．本書における土色・土性、陶器の色調についての記載には「新版標準土色帖」（小山・竹原：1973）を利用した。
5．本書は文化財保護課職員の検討を経て、手塚均が執筆・編集した。
6．発掘調査の記録や整理に関する資料および出土品については宮城県教育委員会が保管し、求めに応じて公開している。

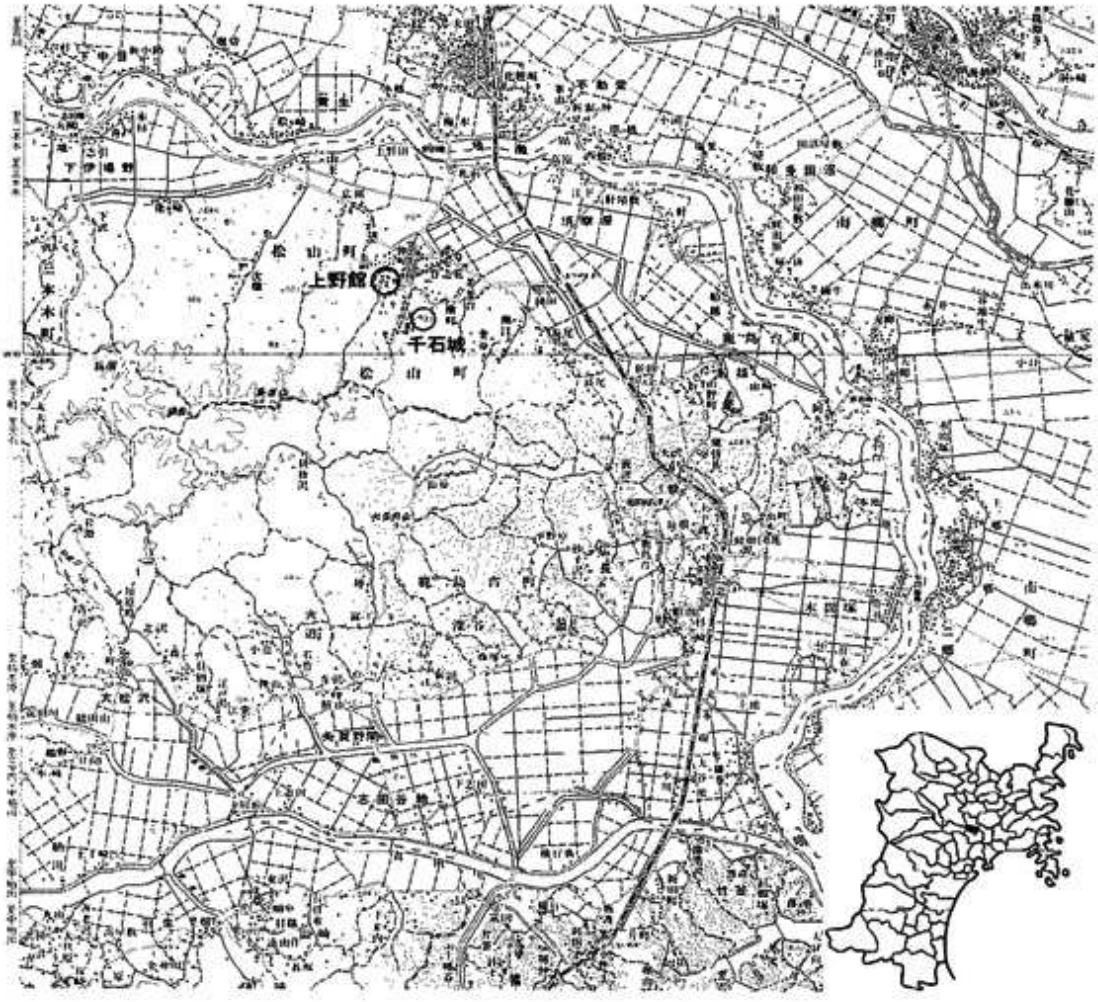
調　査　要　項

1．遺 跡 名；上野館跡（宮城県遺跡地図地名表登載番号 32007、遺跡記号　ＫＮ）
2．所 在 地；宮城県志田郡松山町千石字松山 1－ 1
3．調査面積；約 2100m^2
4．調査期間；平成 2 年 7 月10日 ~ 10 月18日
5．調査主体；宮城県教育委員会
6．調査担当；宮城県教育庁文化財保護課
白鳥良一、手塚　均、小村田達也、大和幸生、佐藤憲幸
松山町ふるさと歴史館
井口裕二
7．調査協力；宮城県松山高等学校、松山町教育委員会、茂庭邦元、菊池　亮、青木祐慶、及川　寛、高橋末市、宮澤忠治、及川安治、円田幸男
及川昭子、本間ゆみ子、円田みよ子、鈴木志満子、小玉富子、佐藤寛子、岩井富子

1．はじめに

上野館跡は志田郡松山町千石字松山に所在する近世仙台藩で一族の家格にあった茂庭氏の屋敷跡である。遺跡はＪＲ東北本線松山町駅の西2.3kmの地点に位置し、町の北限を画して流れる鳴瀬川の南側を東西方向に延びる丘陵の北端部、鳴瀬川の形成した沖積地を望む標高37～39mの高所に立地している。遺跡の東側は比高差約25mの急崖であり、下位には足軽屋敷や町場のたたずまいが残されている。また南側は丘陵地で尾根や沢が複雑に入り組み、北～西側は比較的緩やかな傾斜で沖積地に続いている(第1図)。なお、本遺跡の歴史的環境や調査に至る経過については昨年度の報告書を参照していただくこととして(伊藤1990)、以下ではこれまで行われた調査の概略について簡単に触れておきたい。

発掘調査は宮城県松山高等学校の新校舎建設に係わるもので、昭和63年に遺構の遺存状



第１図　遺跡の位置

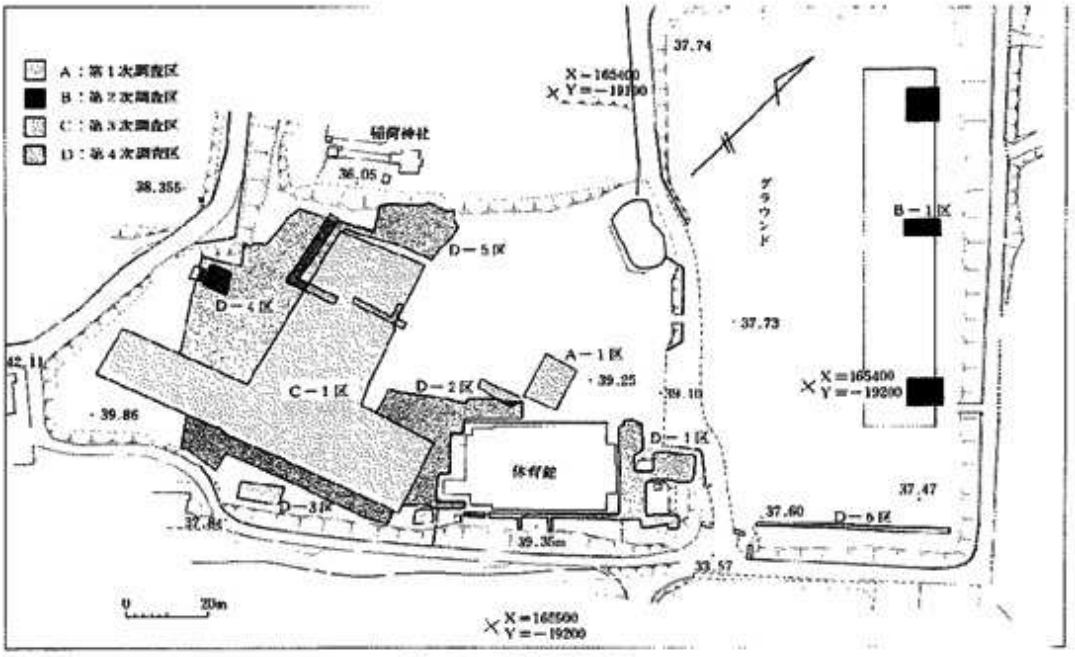
況を確認するための第1次調査を行い、平成元年には第1次調査の結果を踏まえ、第2・3次の事前調査を行っている（第2図)。

第3次調査は新校舎が建設される範囲が対象で、館の南寄りの部分にあたる。検出された遺構は掘立柱建物跡10棟以上、柱穴列1、打ち込み杭列1、溝跡16、土壙28、池跡2、通路跡2、炭窯跡1・整地地業などであり、掘立柱建物跡・土壙・池跡・整地地業には複数期の変遷が見られた。また、掘立柱建物跡・柱穴列の方向は館周りを方形に巡る道路の南脇に相当すると考えられるＳＸ04通路跡および未調査であるがこれと並行して一部に小高く残っている土塁の方向とほぼ同様であり、屋敷内の建物配置が一貫して規則的に行われていたことが伺われた。

また、3次にわたる調査では丘陵の旧地形が西方向に向かって低く傾斜しており、この傾斜地を平坦な屋敷地とするために数回の整地地業を行い、建物を建て替えていること、さらに、中学校校地造成時に南・東側を大きく削平し、北・西側に盛土していることなどの地形の改変も明らかにされた。

2．調査の方法と経過

今回の調査は上下水道工事・地下ケーブル埋設の電気工事・自転車置場など掘削を伴う設備関係施設予定地が対象である。これは大部分が第３次調査を行った新校舎予定地の周



第２図　調査区位置図

囲にあたる。調査区は第2図に示す6地区であるが(D－1～6区)、発掘調査が校舎建設工事と並行する形で進められたため、一部の調査区では工事工程に合わせて調査を進めるという方法を取らざるを得ず、同一地区を数回に分けて断続的に調査した所もある。

調査は平成2年7月10日に開始した。昨年度までの調査で遺構検出面までは盛土が行われていることが明らかになっており、はじめに重機を使用して遺構面までの盛土の除去を行った。盛土は30～80cmほどの厚さがあり、排土は4tトラックを使用して搬出した。

その後、各地区ともにケズリ作業を主に遺構確認を行い、遺構が密に検出されたD－1・D－2区では調査区全体に、他の地区では遺構が検出された部分を主に任意の基準線を設定し、3m単位のグリッドを組み、遺構の精査・図面の作成等を行った。調査面積は約2,100m^2で、調査の終了は平成2年10月18日である。

以下、D－1区～D－6区の順で各地区ごとに発見された遺構・遺物についての記載を行っていく。なお、発見された遺構の方向については現存する絵図(写真図版1)に示された方位に合わせ、現在の校舎正門側を東としている。

3．発見された遺構と遺物

D－1区(第3図)

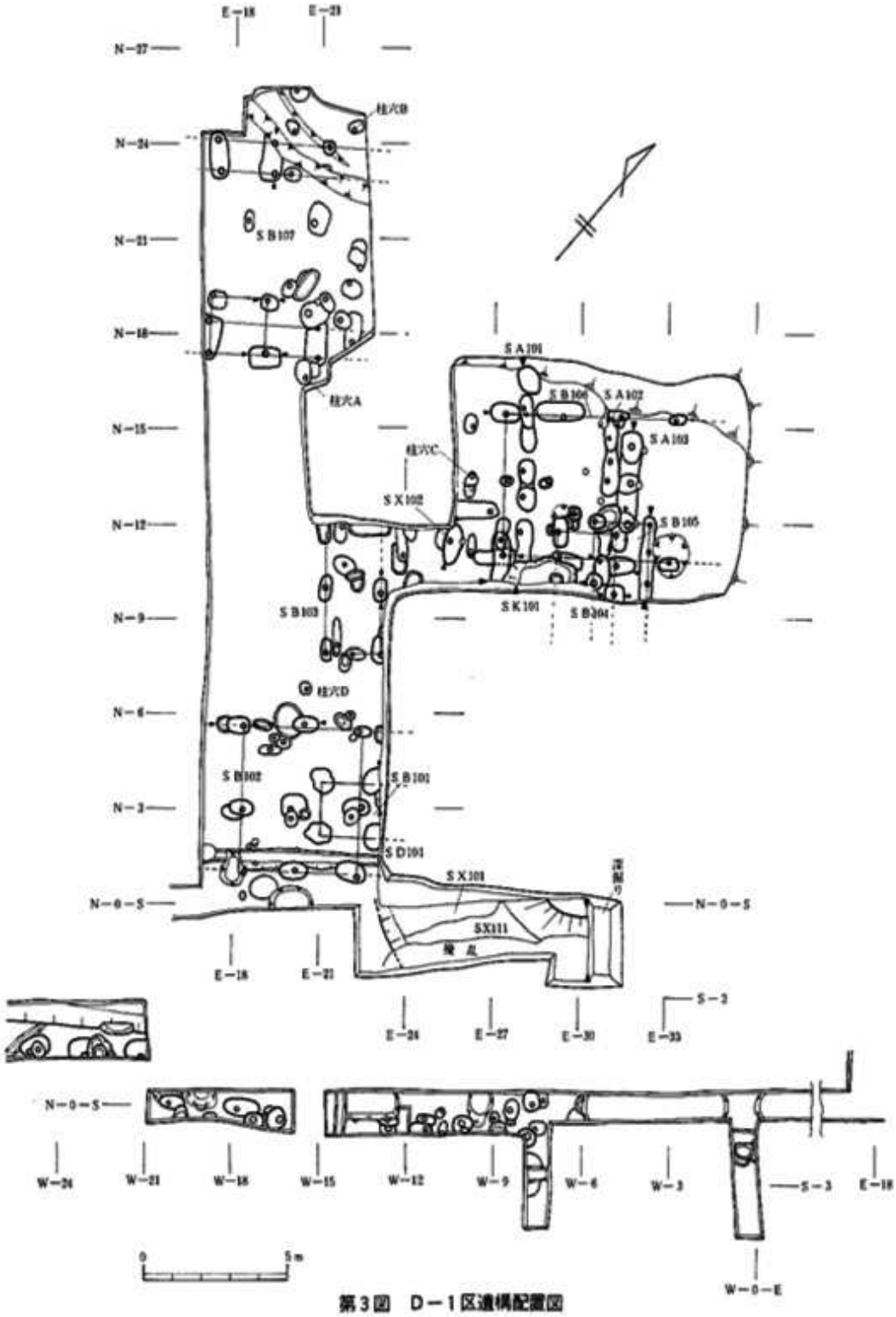
この地区は絵図(写真図版1)によると館跡の表門およびその周辺に相当する場所であるが、昭和26年の中学校建設や昭和28年の町の水道タンク埋設工事で大きな破壊を受け、特に調査区北側はグラウンド用地として調査区より1.5mほど低くまで削平されている。調査の結果、現地表面から約25cm下まで中学校造成時の盛土に覆われ、その下位に削平された地山面あるいは部分的に残る整地面が見られ、体育館東側の幅の狭い調査区では体育館の基礎工事によって1m以上の深さまで掘削されている部分も見られた。

1．発見された遺構

発見された遺構は礎石建物跡1棟、掘立柱建物跡7棟、柱穴列3列、土壙1基、溝跡1条、通路跡1条、整地地業、多数の柱穴などであるが、調査区が狭いこと、主たる部分が水道タンク等で壊されていることからいづれも中途半端なものである。

A．礎石建物跡

【SB101礎石建物跡】径約80～90cm・深さ10cm前後の不整円形の浅い掘り方の中に拳大の石あるいは石の抜き取り痕が残るもので、4個が約2mの間隔で方形に検出された。礎石建物跡の根固め残痕と思われる。地山面で検出され、SB102掘立柱建物跡と重複するが直接の切り合い関係はない。全体の規模は不明であるが北側に展開する建物跡と考えられる(第4図①、写真図版2－1)。



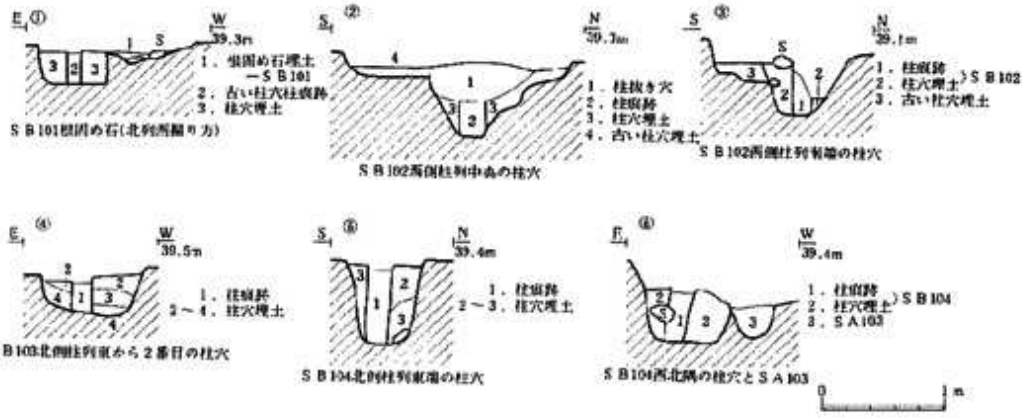
第3図　D−1区遺構配置図

Ｂ．掘立柱建物跡

【ＳＢ102掘立柱建物跡】桁行２間以上・梁行２間の南北棟と思われ、地山面で検出された。ＳＢ101礎石建物跡・ＳＤ101溝跡と重複し、後者を切っているが前者との新旧関係は不明である。柱間は桁行が2.1m等間、梁行は南から2.1・2.4mである。柱穴は桁方向に長い楕円形・隅丸長方形を呈し、長軸0.6～1m・短軸30～60cm・深さ50～70ｃｍで、埋土は褐色シルトに地山ブロックが多量に混じっている。柱痕跡は径15～20ｃｍの円形で、深さは40～70ｃｍである。なお、数個の柱穴に柱の抜き取りあるいは切り取りの痕跡が見られた(第４図②・③)。北列中央の柱穴から寛永通宝が出土している(第８図16)。

【ＳＢ103掘立柱建物跡】桁行２間以上・梁行１間の東西棟と思われ、地山面で検出された。ＳＢ101礎石建物跡と柱筋を揃え、その西側4.2mに位置している。柱間は桁行・梁行ともに 1.9～2mである。柱穴は桁方向に長い隅丸長方形を呈し、長辺 70～80ｃｍ・短軸35～40ｃｍ・深さは40～50ｃｍで、埋土はにぶい黄褐色シルトに地山ブロック・小礫が多量に混じっている。柱痕跡は径15ｃｍほどの円形で、深さは35～40ｃｍである(第４図④)。

【ＳＢ104掘立柱建物跡】３個の柱穴がＬ字状に並ぶもので地山面で検出された。南北および西方向への延びは考えられず、東方向に展開する建物跡と考えられる。梁行は１間である。ＳＢ103掘立柱建物跡の北側6mに位置しており柱筋を揃えることから、同規模の対になる建物跡の可能性もある。ＳＢ105・106掘立柱建物跡、ＳＡ103柱穴列、ＳＫ101土壙と重複し、いづれにも切られている。柱間は桁行が1.9m、梁行が2mである。柱穴は桁方向に長い隅丸長方形を呈し、長辺90ｃｍ前後・短辺40～60ｃｍ・深さは70ｃｍほどで、埋土はにぶい黄褐色シルトに地山ブロックが多量に混じっている。柱痕跡は径20ｃｍほどの円形で、深さは70ｃｍほどである(第４図⑤・⑥)。

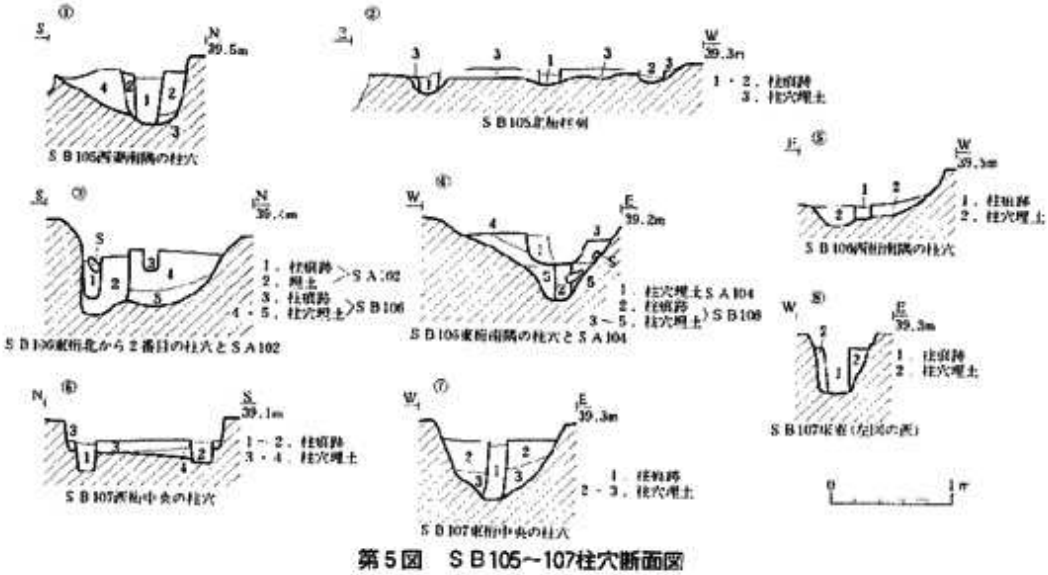


第４図　ＳＢ101～104柱穴断面図

【ＳＢ105掘立柱建物跡】桁行１間以上・梁行１間の建物跡で東方向に展開すると考えられる。地山面で検出され、ＳＢ104・106掘立柱建物跡、ＳＡ103柱穴列と重複し、いずれをも切っている。柱間は1.9m等間で、北列では２間割りで西から0.9・1mである。柱穴は南列が径または長辺が50ｃｍほどの不整円形か楕円形で、深さが60ｃｍほどであるのに対し、北列では長さ2.6m以上・幅40～50ｃｍの布掘り状を呈している。深さは10ｃｍほどで、柱痕跡部分がさらに5～15ｃｍ深くなっている。埋土は地山ブロックが多量に混じる褐色・暗褐色のシルトで微量の炭化物を含んでいる。柱痕跡は径15～20ｃｍの円形で、深さは南列が60ｃｍほど、北列は40ｃｍほどである(第５図①・②)。

【ＳＢ106掘立柱建物跡】桁行3間以上・梁行1間の南北棟で削平の著しい北側に延びる可能性もある。南妻の柱穴は整地面で、他は地山面で検出された。ＳＢ104・105掘立柱建物跡、ＳＡ101～103柱穴列・ＳＫ101土壙・ＳＸ110整地地業・ＳＸ102柱穴と重複し、ＳＢ104・ＳＡ101・ＳＸ110を切り、ＳＢ105・ＳＡ102・ＳＫ101・ＳＸ102に切られるが、ＳＡ103との新旧関係は不明である。柱間は桁行西列で南から1.9・2.0・1.9m、東列で南から1.9・2.0・1.8m、梁行は4.5mである。柱穴は桁方向に長い楕円形を呈し、長軸が0.6～1.6m・短軸が30～50ｃｍ、深さは東列が70ｃｍほど、西列では40ｃｍほどである。埋土は地山ブロックが多量に混じる褐色のシルトで微量の炭化物を含んでいる。柱痕跡は径15ｃｍほどの円形で、深さは40～70ｃｍである(第5図③～⑤)。

【ＳＢ107掘立柱建物跡】地山面で検出した。検出された部分では桁行2間以上・梁行1間の南北棟であるが、より規模の大きな建物跡の一部である可能性も考えられる。柱間は桁行が1.9m等間、梁間が6.6m・6.7mである。柱穴は長辺が1.1～1.3m・短辺が60～70



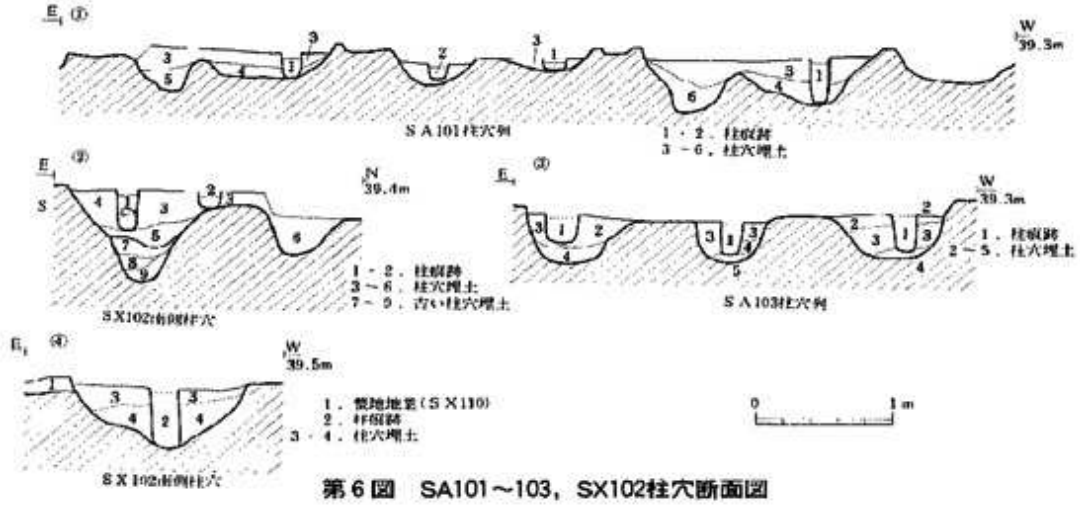
第５図　ＳＢ105～107柱穴断面図

ｃｍ、深さが40～70ｃｍの隅丸長方形を呈し、東桁中央の柱穴を除くと1個の柱穴中に90ｃｍの間隔で2個の柱痕跡が見られる。内側の柱痕跡は床束的なものであり、東傾桁列から1.7～1.9mに並ぶ柱穴も同様のものと思われる。これは一辺あるいは長軸が50～60ｃｍの隅丸方形あるいは楕円形で、深さは50ｃｍほどである。柱穴埋土はいずれも地山ブロックが多量に混じる褐色・暗褐色のシルトで微量の炭化物を含む。柱痕跡は径15～20ｃｍの円形で、深さは40～70ｃｍである(第5図⑥～⑧)。西桁南隅の柱穴から灯明皿（第8図11）が、東桁中央の柱穴柱痕跡から寛永通宝（第8図17）が出土している。

Ｃ．柱穴列

【ＳＡ101柱穴列】東西方向に延びるもので、地山面で検出された。ＳＢ106掘立柱建物跡・ＳＫ101土壙に切られている。柱穴は長さ1.6～1.9m・幅30～65ｃｍの東西に長い布掘り状のもので、4個が連続しており、さらに東西に延びるものと思われる。各々の柱穴からは0.9～1mの間隔で径15ｃｍほどの円形の柱痕跡が認められた。柱穴の底面は凹凸が激しく柱埋設部分が25～40ｃｍで深くなっている。埋土は黄褐色の地山ブロックが主体で、小礫が混じっている(第6図①)。

【ＳＡ102柱穴列】ＳＡ101柱穴列と並行するもので、地山面で検出された。ＳＢ104～106掘立柱建物跡・ＳＡ103柱穴列と重複し、ＳＢ104・106・ＳＡ103より新しく、他より古い。柱穴は長さ約2.0～2.5m・幅30～65ｃｍの東西に長い布掘り状のもので2個が連続しており、さらに東西に延びるものと思われる。西側の柱穴で約60ｃｍの間隔を置いて径15ｃｍほどの円形の柱痕跡3本が見られた。柱穴の底面は柱埋設部分が深く50～70ｃｍである。埋土は黄褐色の地山ブロックが主体である。(第6図②)。柱穴から外面にナデ調整がある丸瓦小片が出土している。



第６図　SA101～103，SX102柱穴断面図